様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：１３５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０４３４６

研究課題名（和文）個の多様性を支える教師のありようと教育実践の変容可能性：運動会に焦点を当てて

研究課題名（英文）Transformability of Teachers for Supporting Child's Development Variations: Focusing on Practices of School Events

研究代表者
東海林　麗香（Shoji, Reika）

山梨大学・大学院総合研究部・教授

研究者番号：９０５５０７４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，「児童生徒の多様な教育ニーズに応じた教育実践」を行うことを教師の専門性とし，その発達のためにどのような個人的・組織的変化が必要か，また，何がそれを促進したり制限したりするのかについて，学校行事と異動という2つの切り口から検討した。その結果，発達が個人にとどまっており，組織のありようや学校文化の変化にまでは影響しているとはいいがたいことが明らかになった。また，それまでの実践知を異動先での実践に結びつけていくような支援がないと異動がネガティブな経験になりうることが明らかになった。総括として，教師の発達をローカルとグローバルの両側面あるものとして捉えることの重要性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学校教育を取り巻く状況を分析するにあたり，「ナラティヴ」に着目したことである。本研究では，実践の当事者である教師のライフ（Life：生活および人生）に根ざした声を収集し，そこから，学校教師が児童生徒の多様な教育ニーズに応じた教育実践を行うために，どのような個人的／組織的変化が必要か，加えて何がその変化の促進／制限要因となるのかについて実践知から明らかにする。それにより現場感覚に根差した研究となり，現場で実行可能なヒントの提案につながる。また，切り口とした学校行事と異動は，日常を異化するような経験であり，それに着目したことによって見えにくい大人の発達の姿を可視化することができる。

研究成果の概要（英文）：This study defined teachers’ professional development as "educational practice according to the development variations of students". We examined what personal and organizational changes are necessary for its development. The focus of the research was on school events and personnel transfers. The results of the study revealed that development was limited to the individual, and it was difficult to say that it had an impact on changes in the organizational structure and school culture. It also became clear that support is needed to link the practical knowledge acquired in the past to new practices. In summary, we pointed out the importance of viewing teacher development as having both local and global dimensions.

研究分野：発達心理学，教育心理学

キーワード：教師の専門性発達　学校行事　学校異動　発達の多様性　ナラティヴ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は，学校教師が「児童生徒の多様な教育ニーズに応じた教育実践」という現代的課題に対応するために，どのような個人的・組織的変化が必要か，また，何がそれを促進したり制限したりするのかについて，「学校行事」「学校文化」「ナラティヴ」という観点から検討するものである。学校行事の中でも特に，小学校における運動会に着目することとした。

研究の背景の 1 つ目として，一斉指導の文脈に乗り切れない子どもを「小 1 プロブレム」と位置づけるように，学校現場では「みんなで一緒に／同じように」という一斉指導を前提とした議論が未だ中心であることがある。その一方で，一人ひとりの教育ニーズに対応することを目指すインクルージョン教育への社会的期待も大きく，現場では教師たちが日々，【個の多様性に応じた指導】と【一斉指導】とのジレンマに悩んでいる。

2 つ目として，学校における「みんなで一緒に／同じように」という価値観が顕になる機会として，学校行事に注目することの意義である。学校行事の目標は学習指導要領によって定められているものの，その内容や方法は各学校の裁量に任されている。内容の取り扱いについての配慮事項としては，「学校や地域及び児童の実態に応じて，種類ごとに，行事及びその内容を重点化するとともに，行事間の関連や統合を図るなど精選して実施すること（小学校学習指導要領）」という記述がある。しかしながら，例えば運動会は 9 割以上の小学校で行われ実施率に地域差は少なく，その内容についても，ほとんどの学校で高学年になると組体操（組立体操）を行うことが慣例となっているなど，学校や地域及び児童の実態に応じた内容の精選が行われているかについては疑問が残る。ここから，「みんなで一緒に／同じように」という価値観が，子どもに対する指導方針としてだけでなく，教員組織のありようとしても優勢であることが見て取れる。「学校行事」と「学校文化」とを関連させて検討する意義がここにある。このような中，先述の組体操については，そこでの事故がインターネット上で動画共有されるなど，学校教育の課題が可視化される機会として着目されていたという背景がある。

このような学校教育を取り巻く状況を分析するにあたり，「ナラティヴ」に着目する。本研究では，実践の当事者である教師のライフ（Life：生活および人生）に根ざした声を収集し，そこから，学校教師が児童生徒の多様な教育ニーズに応じた教育実践を行うために，どのような個人的／組織的変化が必要か，加えて何がその変化の促進／制限要因となるのかについて実践知から明らかにする。それにより現場感覚に根差した研究となり，現場で実行可能なヒントの提案につながると考えた。

２．研究の目的

本研究は，「教育実践の変容可能性」について検討しようとするものである。特に，「児童生徒の多様な教育ニーズに応じた教育実践」を行うことを教師の専門性とし，その発達のために，どのような個人的・組織的変化が必要か，また，何がそれを促進したり制限したりするのかについて検討する。「児童生徒の多様な教育ニーズに応じた教育実践」のありようや，それに関する難しさは，日常を異化するような経験によって可視化されやすい。そのような機会として本研究では，学校行事を切り口として検討を進め，研究のプロセスの中で新たに「教員の学校異動」という切り口を得たことから，この 2 つに焦点化して検討を進めることとした。

３．研究の方法

① 学校行事について：小学校 2 校，高校 1 校におけるフィールドワークを行い，運動会・学園祭の準備期間の観察を行った。運動会については，行事当日のみならず，前後の通常の授業や給食等の日常の様子についても観察を行った。加えて，小学校のみならず学校行事そのものの文化的特性についても検討するため，小学校教師 3 見え，中学校教師 3 名，高校教師 2 名に対してインタビューを行った。
② 教員の学校異動について：インタビューを行った。学校行事に関する質問項目も含まれる。小学校教師 2 名の追跡調査（各 2 回），高校教師 2 名の追跡調査（各 11 回，5 回），小学校教師 1 名，中学校教師 2 名，特別支援学校教師 1 名，であった。
③ 学校異動に関わる授業実践の変容について：1 名の追跡調査である。異動後の 3 年間で計 17 時に授業観察及び録画を行い，授業の振り返りインタビューを 3 回行った。

４．研究成果

① 学校行事について

教師ひとりひとりは「児童生徒の多様な教育ニーズに応じた教育実践」という現代的課題に対応するために試行錯誤し，自身の教育実践を省察したり工夫をしたりしていることが明らかと

なった。子どもの多様性だけでなく保護者・家庭の多様性への対応が求められたケースも多く語られた。しかしその一方で，行事のような学校単位の場面では全体性を優先しがちであること，それのようなことに不全感を抱きながらも，「個に応じた教育」を重視する自身の考えは学校文化にはなじまないのではないか，さらには「甘やかしている」「子どもの学び・育ちのためにならない」などと同僚から批判されたり評判が悪くなったりするのではないかという評価懸念が強くあることが明らかになった。これらのことから，「児童生徒の多様な教育ニーズに応じた教育実践」が個人にとどまっていること，つまりは個々の教師の気づきや実践が，各組織のありようや学校文化の変化にまでは影響しているとはいいがたいことが明らかになった。

感染症拡大後の調査では，学校行事が中止・縮小となったことでその意味や意義について改めて考えたということ，短縮によって準備期間も短くなったことで児童生徒の意欲を醸成するのが難しく，長い準備期間ありきで準備を進めてきたと感じたことなど，未曾有の事態に対応する中で教育についての捉え直しが起こったり，実践を変化させたりしたことが語られた。

② 教員の学校異動および，学校異動に関わる授業実践の変容について

学校行事に関するインタビューの中で，職務や勤務地の異動によって，学校行事のありようは大きく異なり，そこから学校教育や教師としてのありようについての考えが変わったり疑問を持ったりした経験が複数名から語られた。特に中堅以降の異動では，組織にも目が向くようになったという語りもあった。そこで，中堅教師の異動を切り口に，教師の専門性がどのように変容するのかを検討することとした。

インタビューの結果から，異動を受け身的に経験するのではなくキャリア形成のプロセスに位置づけていくことは教師としての発達に寄与するものであるが，これまでの実践知を異動先での実践に結びつけていくような支援（職場環境等）がないと異動がネガティブな経験になりうることが明らかになった。

また，変容への動機づけの維持には以下の 4 つが関わっていた。①新たな勤務先でのうまくいかなさを，「これまでの経験では必ずしもうまくいかないもの」，「自分が変わる必要があるもの」として引き受けること。②同じような立場の他者の話を聞いたり授業を見たり，実践記録・論文を読むなどして「実践的で具体的な対応のレパートリー」を得ること。これは，「いまここでの対応のレパートリー」である。③その上で自身の実践（授業映像）を見ること。さらに他者と対話的に省察すること。④様々な立場の他者と共に問題に対応するなかで，対応のモデルを得ること。これは，「未来のここでの対応のモデル」である。

なお，異動に関する追跡インタビューの中で，はじめから授業に関する語りに変容が見られたが，同時に行った授業観察において教師の言動が変わってくるまでにはタイムラグがあった。実践の型が経験的にできあがっていくことは実践者としての自信につながり，見方によっては専門性の発達といえるものであるだけに，それを変えていくのは難しく場合によっては恐れに着かなることが明らかになった。

③ 成果のまとめ

これらの調査を通して，教師ひとりひとりは「児童生徒の多様な教育ニーズに応じた教育実践」のために試行錯誤し，自身の教育実践を省察したり工夫をしたりしていることが明らかとなった。このような姿勢は，特に中堅以上では，自身の経験の価値やそこからくる自信への脅威ともなりかねない。自分のそれまでの経験を疑い変えようとする姿は，ともすると頼りなく見えるかもしれない。しかしながら「無知の姿勢」を対人援助のプロフェッショナルとしてのありようを示すものと考えるなら，変わり続けようとすること，変わることを恐れないことは教師としての発達を促すものになる。

しかしその一方で，組織単位の場面では全体性や教師文化に優勢な「頼もしさ」を優先しがちであること，そのようなことに不全感を抱きながらも，自身の考えを表明しないことが明らかになった。また，ナラティヴの変容と実践における変容は必ずしも連動していないことが授業観察から明らかになった。これらのことから，個々の教師の気づきが，実践および各組織のありようや学校文化の変化にまでは影響しているとはいいがたいことが明らかになった。

公立学校の教師には，目の前の児童生徒，学級，現任校で求められる「ローカルな専門性」を高めることに加え，どんな児童生徒に対するときにも，いつどこに異動になっても力を発揮できるような「グローバルな専門性」も並行して高めていくことが，求められる姿であると考える。しかしながら実際には，現場では目の前の児童生徒への焦点化ゆえにローカルな専門性が重視されがちであり，一方で各教育委員会により策定されている教員等育成指標はグルーバルな専門性の指標となっている．そのため，自己の専門性発達の道筋をローカルとグローバルの両面から統合的に見通すことは，現時点では難しいのではないか。今後は，発達をローカルとグローバルの両側面あるものとして捉え，各々がどう発達していくのか，またそれらを促進・阻害する要因について検討し，それらを踏まえて教師の専門性発達を支援する研修プログラムを作成することを課題としたい．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計10件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　10件）

１．著者名 小田 雄仁・東海林 麗香	４．巻 26
２．論文標題 高校の教科学習におけるキャリア教育充実の手立てについて ： 進路多様校における生物の授業実践からの検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 教育実践学研究 ： 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 = Journal of Applied Educational Research	６．最初と最後の頁 319～327
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34429/00004950	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 東海林 麗香	４．巻 31
２．論文標題 中堅教師が語る教師・学校にとっての異動の意味 ： キャリア形成としての異動，リセットのための異動	５．発行年 2021年
３．雑誌名 山梨大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 327～337
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34429/00004972	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山本勝也・東海林麗香・服部麻理子	４．巻 68
２．論文標題 現代の公共サービスをめぐる諸問題 ： 心理学・経済学・法学からの検討	５．発行年 2020年
３．雑誌名 山口經濟學雜誌	６．最初と最後の頁 755-793
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 東海林 麗香	４．巻 25
２．論文標題 教師・学校組織にとっての異動の意味 ： 中堅教師のナラティヴからの検討	５．発行年 2020年
３．雑誌名 教育実践学研究 ： 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 = Journal of Applied Educational Research	６．最初と最後の頁 111～122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34429/00004708	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 東海林 麗香・小田 雄仁	4．巻 30
2．論文標題 ナラティヴと授業記録から検討する教育実践の質的変容プロセス ： 教育ニーズの異なる学校への異動を経験した中堅教師の事例から	5．発行年 2020年
3．雑誌名 山梨大学教育学部紀要	6．最初と最後の頁 183～196
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34429/00004742	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 東海林 麗香	4．巻 25
2．論文標題 教師・学校組織にとっての異動の意味 ： 中堅教師のナラティヴからの検討	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育実践学研究 ： 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 = Journal of Applied Educational Research	6．最初と最後の頁 111～122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34429/00004708	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 東海林 麗香・小田 雄仁	4．巻 28
2．論文標題 高校教師にとっての異動の意味と異動に伴う変容プロセス ： ナラティヴおよび学校文化という観点から	5．発行年 2019年
3．雑誌名 山梨大学教育学部紀要 = 山梨大学教育学部紀要	6．最初と最後の頁 233～243
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34429/00001090	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 東海林麗香・上杉尚子	4．巻 24
2．論文標題 教師にとっての異動の意味とそのプロセス：実践者と研究者の往復書簡による検討	5．発行年 2019年
3．雑誌名 教育実践学研究　山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要	6．最初と最後の頁 177-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 東海林 麗香・小田 雄仁	4．巻 27
2．論文標題 異動を通じた教師の変容 ： 公立高等学校教師による実践記録の分析から	5．発行年 2022年
3．雑誌名 教育実践学研究 ： 山梨大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 = Journal of Applied Educational Research	6．最初と最後の頁 275～287
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34429/00005110	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 東海林 麗香	4．巻 29
2．論文標題 教師が学校行事で経験する個と集団のジレンマ ： 小中学校教師のナラティヴと教師文化に焦点を当てて	5．発行年 2019年
3．雑誌名 山梨大学教育学部紀要 = 山梨大学教育学部紀要	6．最初と最後の頁 127～137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34429/00001069	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 東海林麗香・小田雄仁
2．発表標題 ナラティヴと授業記録から検討する教育実践の質的変容プロセス：教育ニーズの異なる学校への異動を経験した中堅教師の事例から
3．学会等名 日本教育工学会
4．発表年 2019年

1．発表者名 東海林麗香
2．発表標題 教師にとっての異動の意味と異動に伴う変容プロセス３：異動は組織を変えるのか
3．学会等名 日本教育心理学会
4．発表年 2019年

１．発表者名 東海林麗香
２．発表標題 教師・学校組織にとっての異動の意味：中堅教師のナラティヴからの検討
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 東海林麗香・半澤礼之（シンポジウム企画）
２．発表標題 ローカリティから考える教師の発達：地域間移動と学校間異動に焦点を当てて
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 東海林麗香・小田雄仁（シンポジウム話題提供）
２．発表標題 ナラティヴからみる教師にとっての異動の意味と 異動に伴う変容プロセス：現象のローカリティに 着目して
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 東海林麗香
２．発表標題 教師が学校行事で経験する個と集団のジレンマ：小中学校教師のナラティヴと教師文化に焦点を当てて
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 東海林麗香・小田雄仁
２．発表標題 教師にとっての異動の意味と異動に伴う変容プロセス２：小学校・高校におけるナラティヴおよび学校文化という観点から
３．学会等名 日本教育心理学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 東海林麗香・小田雄仁
２．発表標題 教師にとっての異動の意味と異動に伴う変容プロセス： 高校における学校文化・学校ナラティヴという観点から
３．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関